

子供の遊び (その4)

第三章 自然と文化の間 (B)

E・A・A・フェルメール

浜口 順子訳

(一) 遊びと児童文化

子供がいかにして遊びの中にルールや習慣を取り入れるのか、そしてこの事にどういう意味があるのかという問題から始めよう①。文化的世界における伝統的な諸形式と同様に、遊びにも遊びの伝統とでもいうべき遊びの諸形式が—大人のマネをしながら—保持されているのだろうか。日常生活において子供は習慣やルールの基準を

絶えず習得し、自分の行動および時間さえをも統制・分化しようとしている。こうした共同社会で受容されている秩序の諸形式に自らを適応させるのだ。これに並行して遊びの諸形式というものが實在し、子供はそれに適応している。たとえば数人が歌に合わせて輪になって回るような遊びでは、規則性や反復が大変重要な役割を果たしている。こうしたものは年長の子供たちから引き継がれるが、引き継がれた側の子供たちにもやがて、この遊

び形式を年少の者たちへと伝える番がまわってくる。児童文化や子供の伝統と呼び得るものは、この結果なのである^②。遊び形式の保存はこの過程においてこそ明らかとなるのだし、そこに遊び形式は内在している。ところでこの遊び形式の継承は、大人の世界で見たことの模倣、あるいは服従として行なわれるのかどうか考えていこう。

私たちの知る限り、繰り返し起こる出来事や習慣を含んだ日常生活は、子供が生きて遊ぶ際の背景を構成している^③。習慣はたしかに安全性、つまり遊ぶ自由のための条件を創出しているが、だからといって習慣がそれ自体で安全なものだということはできない。たとえば遊びを存続させるものとしての「驚き」は、伝統自体とは共存し得ないものだからだ。遊ぶ自由についてまず問うのがやはり妥当であろう。子供が自らの形式付与やイメージ像を喚起するのは、習慣・伝統によってではなく、遊ぶ自由と共存しているがためだからである。他の人のすることをマネする時、こままわし、石けり、ビー玉遊び

などの特徴的な遊びの仲間に入れてもらおう時、やはり主体的な形式付与を生みだす自由がそこにあると言えるのだろうか。ブリュエールの絵（子供の遊び）を見ると、何よりもまず目にとびこんでくるのは伝統的要素であり、当時遊ばれていた多くの遊びが彷彿とよみがえってくる。その上、馬とび、輪になって一緒に回る遊び、なわとび歌、言葉遊びなどを見ると、習慣やルールの上に、ある固定性が保持されていることに気づく。思うままに動いてイメージ像を即興的に創り出す遊び的循環性運動^④とは、著しく違うものだ。

伝統的形式を子供が保持していると考えるのは正しくない。秩序やルールの保持には親たちが先んじているからである。ルールは反復性と様々に連関し合っている。すでに述べたように反復性は、例えば遊びのダイナミクスに属している^⑤。しかしそれとは別に、遊びには硬直的な反復も現れるのであって、これを模倣とは区別しなければならぬ。この強迫的な反復を判別するには、自然的な生の領域を省察しなおす必要がある。その際見出

だされる反復衝動は、フロイトが保守的な欲動だとするものだ^⑥。つまり反復衝動は欲動的傾向と無縁ではないので、反復と保持を伴う遊びはルール、習慣、伝統などによって親から子へ伝えられる文化的影響ばかりを受けているわけではない。そうするとそれは多分ブリューゲルが私たちに示している通りのものなのだろうか。その「子供たち」はいろいろな形式の遊びを通して、自分たちの自然的本性も露わに表現している。「汚ならしい頭と粗野な顔をした獣たちなのだ。自然は往々にして無気味さともなる。」^⑦自然性と文化的影響の両者に関与しつつ、こうした遊びをするのだろうか。フロイトの意図したような双方の結節点は見出されないにしても、遊びの本来的な領域を照射し刺激するような二つの周辺領域が存在するということなのだろうか。

遊びが本能的衝動の排出口以上のものであることは前章で述べた。本章では、一方では子供の未来・目的指向的模倣によって、他方では親の文化指向的教育（保育）

によって遊びの中にもたらされる剰余的価値を、その排他性に対置できるかどうか考えてみよう。つまり遊ぶ自由や創造性などが、その遊びの剰余的価値に内在しているのかという問題である。

前章の結びで、子供が形式を伴なう遊びをしようという時に、遊びは自然被拘束性を超えて現れてくるという結論に達した。その際子供は自ら形式を与えるという驚嘆すべき契機を通して、遊びを高次元へと展開させるようになる。しかしこのためには子供固有の操作、創造的な操作を要する。この創造性については、次に扱う伝統的でルールのある遊び（すでに定式化された形式をもつてすすむ）に触れた後で再び論ずることとしよう。

（二）ルールにはさまれた遊び

ここでは遊びを規定している固定的な軌道の意味に注目して考えていく。つまり形式やルールに沿って流れてゆくような遊びである。小学一、二年頃の遊んだ思い出

に浮かぶ、例えば「オランダに一軒家」(＊日本の「かごめかごめ」のような歌)などの輪になってする遊びにおいて、そこに主題があるうとなかろうと歌に合わせで遊びの流れが規定されていたものだ。このような遊びには、私たち自身で考え出したわけではない形式やルールが前以てあり、それに喜んで従っていた。そればかりか、そういう遊びには何やら儀式めいた感じまであった、初めのうちはなんとなくおそおそと威儀を正し、畏敬の念のようなものを抱いて参加していた。期待されるべきものは形式・ルールによって確定していたにもかかわらず、輪になって一緒に遊ぶのはやはり、何か決定してしまっているものを期待する以上のものが約束されている、ひとつの事件なのであった。何かしらびっくりするような事が起こるだろうという期待と、自分も今、そこに参加しているのだという思いに、胸をふくらませていた。小学校低学年児童や幼稚園の年長児にとって、皆で輪を作る伝統的遊びは、今だにいつも何か新しい何かを秘めた遊びである。子供同士の仲間を作るようになって

てまだ間もない頃だ。一緒に行動し、参加し、共同遊びができるという体験によって、子供は共存していることを感じながら期待をさらに押し広げる。こうした遊びのきまった流れを知るとは、導入的な事柄であると同時に、遊びを遊び共同体の中に位置づけるということでもある。もしルールが完全にではなく部分的にしか機能していないような不思議な遊びの輪があったとしたら、一体どれだけでもこたえられるだろうか。

年長の小学生が輪になって遊んでも、もはや秘密めいたものを感じとらないだろう。もうその遊びは終わったのだ。すでに子供は仲間の中に自分を位置づけており、仲間の中の自分の役割を担って遊ぼうとする^⑥。ボールを使った遊びの循環性運動は、徐々に難しくなっていく一連の形式パターンを経て、より堅固な遊び形式へと変化している。例えばボールを投げ、壁に当ててはキャッチするにしても、次にキャッチする際には一度くるりと体を回してから……というように、難度を高めていくのである。ルールというものが遊びを次第に複雑なもの

にしている。そうしてルールは遊びを限定するのだが、そのルールの内側には不確実性が、つまり勝つか負けるかという蓋然性が存在する。ビー玉遊びの時、地面を仕切って引いてある線を踏んではいけないというルールがあっても、偶然そうしてしまうおそれはいつもある。子供は仲間の中に身を置き、遊び共同体が形成されている場において、勝負の蓋然性と共に遊んでいる。しかし遊びはルールをめぐってすすむのだろうか。そういうこともある。成長し小学校の最高学年にもなれば、ルールを監視するのは子供たち自身である。ルール作りや、尊重されるべきしっかりした約束事を決めるのに口げんかもして、多くの時間を費したものであった。自分達で作った秩序からなる小世界が、遊ぶ自由をかえて狭めて許容しないことも起こった^⑩。それでも私たちは一人一人諸ルールの狭間にある、遊びに意味や価値があることがわかっていったし、それを守らなければならなかった。かくれんぼの途中で、自分が「鬼」になっているのに家に帰ってしまう子供は、子供だった私たちの目には、誤まっ

た遊び方をしているのだった。この「誤り」は単なるルール上の問題というより、遊び自体の侵害を意味していた。

ルールが遊びに制限を与え、結着さえつけねばならないという事実は、制限範囲内における諸可能性、蓋然性（チャンス）、不確実性などを排除するものではない。遊びが極端に複雑でなければ、遊びの約束事やルールが年かきの小学生によって牛耳られる必要も生じる。それでも、例えばある少年が一人よがりのルールをただ押し通してサッカーに加わるというのでは不十分である。彼も遊びに参与して、勝負のチャンスを共有して初めて「すてきな」遊びになることを理解しなければならぬのだ。日常生活でも約束事は時間を守ることで支えられているだろう。しかし逆にルールを尊重して遊びから逸脱してしまうこともあり得る。たとえば分捕り品を介して遊ぶ場合、仲間から勝ち取ったビー玉を持ち去りたくても、分捕り品はもう一度遊びに使わなくてはならないんだという事を、他の子供が忘れさせない。遊びが分捕

り目当てになったり、ルールが特定の目的に結びついて固定的なものに化すと、遊びはルールによって維持されなくなる。年長の子供たちはルールの狭間にある遊びの価値に目が向くが、この場合、この位の年齢の子供であると、その態度や姿勢が大抵は（自分自身によってではなく）他律的に統制される必要がある^⑧。

遊びは必ずしもルールによって進められていくわけではないから、ルール自体が遊びの実質的な部分であるというわけではなく、遊び自体―遊びのイメージ―はやはり子供自身によって保持されていることは当然だ。ルールをあまりに固く守り過ぎると、ルールが遊びを阻害する周辺の領域になるという点を明確にしておく。遊びはルールに従って進むのではなく、ルールの狭間にあるものをめぐって展開するのである。

今度ルールが必然的な制限あるいは排出口を形成しているような遊びを見ていくことにしよう。同時に新たな問いが現れてくる。はたしてこういう遊びが十分に遊びと呼べるものなのかどうか。

（三）遊びの競争

子供も年かさになると、それほど複雑でなければ遊びのルールを把握し尊重することもできるが、競争的遊びをする時には、まだ大人の指示をありがたく利用する。こういう遊びでは子供はどうしても目的、利益（分捕り）成果などに関心を奪われがちになるのでルールが必要となるのである。また競争しようとする衝動が前面に強く押し出されることによって、遊ぶ自由の維持が困難になる。期待や驚きは、ここでは二つの周辺の領域には含まれた狭い部分に起こる。すなわち一方には勝ちたいという自然的情熱という領域が、他方には勝負を筋道に沿って導くためのルール・約束事という領域が、遊びを展開させる期待や驚きなどの感情に隣接してあるのだ。それでは子供が競争的遊びに必要な態度や姿勢をとれない場合、大人が遊ぶ場を組織したりルールを決めたりすることを通して、遊ぶ自由を子供に保障してやれるのだろうか。

日常的世界が労働によって非常に機能的に統制されているため多くの時間が余り、技術革新が労働価値を低減させている現在、余暇の過ごし方には多くの関心が集まり、この傾向はますます増大していくだろう。この結果大人は子供の自由時間の利用法にも配慮しようとし、たとえば休暇のレクリエーションや近所の人達とのパーティなどを企画する。競争的遊びはそんなプランによく組み込まれるものだ。

こんなパーティでの遊びなどを眺めながら、特に遊ぶ自由に注目してみたい。子供たちは大抵、袋跳びやうさぎ跳び、スクーターボードやローラースケートの競争に勇んで参加している。しかし観察するうちに、見物人と、競争の参加者としてパーティに貢献している子供との間に、相違点のあることが思いあたる。まだ順番の回ってこない子供たちには驚きや期待のムードが充満しており、それは我が子に同伴し激励している親たちのまわりも同様である。彼らは見物人だ。彼等の前で遊びが行なわれているのだ^⑧。彼等の眼前である出来事が遊び的

ムードの中で起こっているのだ。しかし彼等は遊んでいない。なぜならアクティヴに参加していないからだ。遊びや遊ぶ自由についてこのレクリエーションを考察する気なら、参加している方の子供を観察すべきである。

自我の活動性を、参加しているどの子供にも認めることができる。少なくとも彼等は勝つために全身全霊を打ち込んでいる。マラソンやローラースケートで一等になる、というような目標に無関心でいられる子供がいるはずがない。しかしそういう目標は、勝負の蓋然性を含んだ遊びの場の内側にあるわけではない。遊びの場を組織するのは指導的立場にある大人だとはもはや言えまい。そこはすでに、参加者たちがただ勝利に向かって目的指向的になる競技場ではなくなっている。観客も時にそこに巻き込まれるが、やはり彼等にとっても競技は勝負のためだけの競争ではないのだ。観客も自分の情動を選手たちに投入し、緊張を共有し、遊びとしての競争に必要な解放感にはひたれずに息をのむ体験をしている。

競争的遊びは参加している子供にとっては、目的・利

益指向性の支配した非常に窮屈な場で練り広げられている。期待や驚きがかもし出す雰囲気も、子供が競争的衝動から自分を解き放つことができないければ、何の効果も生み出せず、遊びが発展していかない。大人が競技の指導するのはルールを順守させるためであるので、目的の成就や失望の敗北を見ないうちに遊びがおしまひになつてしまえば、大人からどんな手も下すことはできない。遊ぶ態度や遊ぶ自由などを、その周辺領域であるルールを強化することによって組織することはできないのである^⑥。

自然的諸傾向から見た子供の態度と、他者の模倣や目的指向性なしに遊ぶための自由は、自我の活動性と結びついている。そしてこの自我の活動性を、自我の創造的な志向性としても理解していかねばならない。子供が自分自身で喚起する形態・形式を伴って遊ぶことができる場合、このことは殊に明確になる。

さてここから、すでに触れた形式付与的な遊びへと深くアプローチしていけるだろう。

(つづく)

原註・参考文献(抄)

- ① J. CHATEAU, *Le jeu de l'enfant*, Paris, 1946.
- ② L. J. STONE & J. CHURCH, *Childhood and adolescence*, N. Y. 1966.
- ③ O. F. BOLLNOW, *Neue Geborgenheit* ボルノー『実存主義克服の問題—新しい被護性—』未采社
- ④ 遊び的循環性運動、第一章参照
- ⑤ 反復的運動を、第一章では循環的・円環的運動として考えた。
- ⑥ S. KUYPER, *Enige aspecten van vrij en dwangmatig herhalen*, Hilversum, 1963. カイパー『自由な、そして強迫的な反復の諸局面』反復のゲシュタルトを三様に扱っている。1. 前進的な時間の動きの中ですすみ、労働と共に起こる非固有的反復。2. 発展的な特徴をもち(即興の如く)、より高次の水準に到達していく、遊び的循環における純粹な反復。3. 閉じた循環系の中で、絶えず同一点に戻ってくる強迫観念的反復。

⑦ PIETER BRUEGEL D. Ä., in *Orbis Pictus*, Bnd 36, Hallweg, Bern 1961.

⑧ この年齢の子供にとって自己確定は大きな役割を果たす。Chateauによれば自我の確認 *L'affirmation du Moi* は、一般的特徴とされているが、この見方とは反対に、我々はこの自己確定は遊びの発展とは対向しており、むしろ「自己を遊びの中に位置づける」ことの方がより本質的であると考える。

⑨ ルールには、不意に起こったりびっくりするような出来事にも動じない、強制的な性質がある。

⑩ 自我の活動認識 (*kohinstamm*) は自我の態度としてここでは理解されており、その自己確定が遊び共同体に共働するよう適応させる。これにはルールを知り、守るだけでは足りず、遊びに形やゲシュタルトを与えるような、子供のアクティヴな態度や構えも必要となる。

⑪ 遊びを直観的に考察していく際、意味付与する主体によって喚起されたのではない現象を、遊びの本

質を究明する上での出発点とすることには批判的でありたい。現象と存在 *existence* とは区別されねばならない。遊びが遊んでいる主体にとって遊び世界でない限り、見物人の前で遊ばれているのだから、遊びと呼ばれているものはまだ遊びではないのだ。出来事として「遊んでいる」ということは、そこに能動的に関わっている人にとって遊びであるとは限らない。

⑫ F. J. J. Buytendijk はサッカーにおける原始的攻撃的要素に注目している。(Het voetballen, Utrecht, 1952. 『サッカーするとういうこと』) サッカーには周辺の領域の支配がよく起こり得ることを明らかにしている。そして遊びの自由がルールをきっちり守ることによってもたらされるのではなく、プレイヤーが自分で持ち込まねばならないことがわかる。

(お茶の水女子大学大学院)